

テサロニケの信徒への手紙 Ⅱ 1章1節～2節 パウロ、シルワノ、テモテから、わたしたちの父である神と主イエス・キリストに結ばれているテサロニケの教会へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

パウロの手紙の書き出しは定まった挨拶である。手紙を書いた送り手、手紙の受け手、そして、祝福の祈りの三つである。Ⅱテサロニケも、送り手はパウロ、シルワノ、テモテから、テサロニケ教会宛である。シルワノは使徒言行録ではシラスと記されていて、同一人物である。「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」という祝福の祈りで始まる。

パウロたちは、第二宣教旅行において、ヨーロッパに渡り、フィリピ、テサロニケ、ベレア、アテネ、コリントと宣教を続けて来た。テサロニケの信徒たちがユダヤ人から迫害を受け、苦しんでいるのを案じ、テモテを派遣したところ、固い信仰に立って励んでいるという報告を聞いて、喜びと感謝の手紙を書き送った。その時期は47年頃、発信した場所はコリントで、著者は歴史背景からもパウロ自身であることに間違いない。テサロニケ教会から、主イエスの再臨に関する質問を受け、それに答えている手紙がⅠテサロニケである。パウロの初期の終末信仰は、今すぐという緊迫した信仰であることが分かる。

Ⅱテサロニケの著者もパウロとなっている。確かに、Ⅰテサロニケと類似した点が多い。牧会者パウロの愛と真実は変わるところがない。しかし、パウロの名を借りて、後世の人が書いたのではないかという人もいる。Ⅰテサロニケにおいて、主の日、終末はすぐにも来るという緊迫感があるが、Ⅱテサロニケにおいては、遅延し、将来のこととして捉えられている。また、主の日は既に来たと熱狂する人々がいるが、動揺して慌てふためかないようにと、諭している。Ⅰテサロニケとは時代背景が違うようである。もちろん、主の日の遅延に関する疑問が起り、主の日は既に来たと熱狂する人々がいたことは確かなので、時代背景は違っていても、パウロが書いたとも言えよう。

しかし、特に気づかされることは、主の日の裁きにおいて、キリストを拒み、受け入れなかった人々に対する裁きの凄まじさである。確かに、パウロにおいても、肉と霊の二分化ははっきりしている。ガラテヤ書5章19節～23節bでは下記のように書いている。「肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのものです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。」

聖書では、祝福と呪い、霊と肉、右と左と、二分化し、祝福、霊、右に結び付くように勧める書き方は多い。私は、単純に二分化することに疑義を持っている。人間は、二分化できない複雑な葛藤の中にあると思うからである。Ⅱテサロニケには、パウロの言葉とはとても思えない言葉が数々あり、終末の裁きにおける不信者たちへの神の報いは永遠の破滅であると告げている。だから、Ⅱテサロニケの著者はパウロではなく、パウロの名を借りて、書いたものではないかと私は思っている。著者を「著者」と呼んでいきたい。